18）『方伎雑誌』にみる歯科的事項

Studies on the Hōgizashi and Dentistry

医の博物館　西巻明彦
日本歯科大学　屋代正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

『方伎雑誌』の著者，尾台榕堂（1799～1870）は，現在の新潟県十日町の出身で，天保5年（1834）師である尾台浅嶽の死後尾台家を継いでいる．『方伎雑誌』は，最晩年の書で，死の1年後明治4年（1871）に出版されている．尾台榕堂は，当時浅田宗伯とならぶ流行医であったという．『方伎雑誌』の意図するところは，「医術ノ要ハ，方意ヲ得ルニアリ．方意ヲ得ルハ　薬能ヲ詳ニスルニアリ．但一味ノ能アリ．一方ノ効アリ．故ニ唯薬能ノミニ就テハ，方意ノ解セザルモ有レドモ，先ヅ薬能ヲ知ル時ハ　方ノ運用変通，自由自在ヲ得テ，方ヲ使フコト，恰モ猿舞シノ猿ヲ使フガ如シ．」と述べ，方意と薬能の重要性を主張している．

『方伎雑誌』にみられる歯科的事項は，79「紀州藩，筒井八十之丞ノ新婦．鉄漿ヲ附ケントスルニ．俄ニ咽中ヘ物ノ閉ヂ塞リタル様也．其時別ニ病人アリテ．余其ノ家ニ住キケレバ．新婦急ニ診ヲ乞フ．之ヲ眎ルニ．咽中ニハ仔細ナシ．但会壓ガ長大ニナリテ下リ．先キハ咽ノ下ニ附著シ．色ハ紫也．新婦云フ．痛ハセザレドモ．咽ガ一パイニ塞リタル心地也ト．余測瘡子ニテ．探リ見ルニ．長大ニハナリタレドモ．マダ焮腫セズ．柔カニテグニャグニャトシテ．前後左右ヘ動キ．ナカナカ針ハ施シニクキアリサマ也．然レドモ其形ノ長大ト色トヲ見テハ．血ヲ取ルヨリ捷径ノ術ハナシ．余，新婦ニ対シ．若シ日後咽喉会壓トモ．痛ヲ発シ．飲食ノ通ゼヌニ至ラバ．ユコシキ大事也ト．説キ聞カセケレドモ．針ヲ懼レテ肯ゼズ．余，百方説論シテ．鋭利ノ喉痺針ニテ適宜ニ刺シケレバ．紫血淋漓トシテ出ヅ．瀉心加石膏湯ヲ六貼与ヘ．水硼散ヲ度度吹キコマシム．但六貼ノ薬ト一針ニテ．サラリト治シケレバ．病家ニテハ妙也トテ嗟歎セリ．蓋初起神速ニ治ヲ施シタル故也．是ハ万病トモ同一理也．」と記している．榕堂は，本道の医師であるが，外科の医術をこころえていたことは特徴的である．今日，本来的な口中医は，どのような治術を行ったか明確でない点もあるが，この治験例はその一端を示す上で貴重である．測瘡子とは，今日で言うゾンデであり，またカテーテルの記載も『方伎雑誌』にあることから，漢方医の間でも普及していることがわかる．さらに榕堂は，針灸の施術も行っており，きわめて有能な医師である．瀉心加石膏湯とは，三黄瀉心湯に石膏を加えた処方で，投与した理由は記載がないが，瘡毒を内消させるには，三黄瀉心湯は有効であり，石膏は腫れの基本方剤であったためと思われる．瀉心加石膏湯を投与したことから考えて，脈は数脈であり，また石膏を投与する方意として煩渇があることから，口蓋垂の炎症を煩渇ととらえたためと思われる．現代歯科医学的に解釈するならば，切開排膿を行い，抗炎症剤を投与したことになる．

また，71に「麾下伊丹氏ノ室．年二十．喉痺ヲ患フ．悪寒発熱．肩背強急シテ．声出デズ．先葛根加桔梗湯ニテ．十分ニ発汗シ．継イデ桔梗湯ニ．瀉心湯ヲ含シ．日日五六貼ヅヽ用ヒ．血ヲ度度取リタリ．然レドモ炎暑ノ時節．殊ニ熱勢甚ダシケレバ．胸膜ノ熱焔蒸騰シテ．咽中糜爛次第ニ広ガリタリ．因テ黄連解毒湯ニ．石膏ヲ多ク加ヘ用ヒ．日日五六度ヅツ冰硼散ヲ．咽中ヘ吹キタレドモ．更ニ効ナシ．口中科モ診シタレドモ．咽中ノ体ヲ視テ．胆ヲ落シテ．帰ルノミ．病人ハ薬ヲ勉強シテ．一貼ヲニ二三度ニ飲メドモ．米飲炊湯ノ類ハ．少シモ用イル事カナハズ．炎熱中苦痛シ．不食不眠故．大イニ弱リ，十二，三日ニテタオレタリ．余ハ喉痺．喉癬．纏喉風．咽喉結毒等ヲ療スルコト．数十人．不治ノ病人モアリタレドモ．カホドニ精気ノ早ク脱シタルハナシ．嫩脆ノ質トハ云ヒナガラ．遺憾ト云フベシ．」と記している．ここで口中科の守備範囲であるが，口中と

は現在で言う口腔だけではなく，咽喉も含む点である．この条文は，口中科医が明らかに咽喉をも治療することを示した治験例であり，重要と思われる．

榕堂は，この他にも舌炎などの治験例を記載している．当時の口中の施術は，切開を行うこと，清熱剤の投与を行うこと，冰硼散などの吹薬を吹きつけることが，主要な施術であったと考えられる．19世紀中頃，榕堂の治療術が世界的にみて，時代遅れであったのかどうかは判然としない面もあるが，痘瘡の治療において『方伎雑誌』の中で，治療方法さえ誤まらなければ，難しい疾患でないと述べていること，さらに，ヘボンにことわられた患者を，茯苓飲加半夏で治癒させたことが記されている．同時代の浅田宗伯が，フランス大使館の病人を救ったことにより，ナポレオン3世から表彰状を送られたことを考えるならば，抗菌剤，抗炎症剤のない当時，榕堂らの治療は，世界的にみて有効な方法と考えることができる．